



Aozora

君だけを
見つめてる

橋本昂祈
AKINORI HASHIMOTO

目次

向日葵の涙	1
☒	1
☒	1
☒	2
☒	3
☒	4
☒	5

向日葵の涙

夏が音を立てて崩れ落ちた。見渡す限り向日葵が咲いていた。夏の景色がモノクロームに染められてゆく。君の奏でるあのピアノの旋律に恋した遠い夏。燃ゆるほどに憐く。君と手を繋いでフレアの空を見つめた。真夜中のブルーは鮮やかな記憶を呼び起こす。

めぐり合わせの不思議について語る時、君は遠く、空を仰いだ。

夏の終わり。

まるで綿菓子のような夢。祭りの後に残るのは、ただ、君に会いたい。

無常にも時は流れて

慈悲の雨は流れて

千の祈りを数え

また、向日葵の季節めぐる。



「医者娘に恋しただど？」

ふだん冷静なマコトだが、僕の突然の告白に半ば呆れ顔だ。

「誰にも言うなよ。特に地元のヤツらには絶対に内緒な」

「写真とかある？」

マコトはなんでも顔で人を評価する。悪いクセだ。僕はスマホの待ち受けにしてる写真をみせた。

「めっちゃくちゃ可愛いじゃん！ 年はいくつなの？」

「4つした。まだ大学生だよ」

「どこの大学？」

「いちおう慶友義塾大学」

「慶友ったら文系私大のトップじゃん！」

「まあな」

「どこで出逢ったんだ？」

「品川の喫茶店」

「ミラーズか。おまえまた巨乳目的で行ったんか。んで、名前は？」

「りょうこ。藤原涼子」

「アニメのヒロインみたいな名前だな！ もう祐介には無理ゲーじゃね？」

「諦めるのはまだ早いわ。オレ、勉強強して絶対に慶友入ってみせるから！」

「バカ。知らねーのか？ 慶友に入るには一日最低10時間は勉強しねえと。祐介には悪いけど、俺より偏差値低いお前が半年で慶友合格するなんて無理だよ。かすりもしねえよ。しかも、彼女は大学3年生だろ？ 就活の時期じゃん。祐介だっていちおう社会人なんだから、音楽の道は諦めてさっさと良い会社に就職した方がいいって」

「マコトの言ってることはよくわかる。アドバースありがとう。でも、不純な動機かもしれないけど、涼子ちゃんはプロのピアニストとしても活動してるんだ。だからオレだって夢を諦めたくない。そりゃマコトが言うように常識的には就職した方が良い道かもしれないけど、そんな人生、オレには退屈すぎて…」

「祐介…。少し疲れてんな。ギターはギターで俺は応援してるし、この先も応援していくつもりだ。お前にはギターしか取り柄がないからな。けど、ギターで夢掴むならば、ギターに専念しろよ。悪いことは言わない。慶友は諦めろ…」

「マコト。悪い。今日はそろそろ帰ってくれ…」

「わかった」

言ってマコトは僕の部屋から出て行った。



東京都大田区大森海岸に借りてるマンションからバイクで品川へと向かう。黒いヘルメットが夏の日差しを吸収して頭がむし暑い。今日は藤原涼子ちゃんの出勤日だからいつもよりお洒落してきた。ロック好きな涼子ちゃんの好みに合わせるため、夏だつてのにレッドウィングのブーツにヴィンテージのリーバイス、トップスはミッシェルガンエレファントのツアーツシャツにふだんは着ないサマージャケットを羽織った。

愛車であるヤマハSR400は快調に国道15号を走る。信号待ち。バイクを停車中に時計を見る。16時半を過ぎたところだ。涼子ちゃんの出勤時間は17時。駅前のパチンコ屋にバイクを停めればタバコ一本くらいは吸えるだろう。

僕は品川駅のパチンコ屋の前でバイクを止めてタバコを吹かした。喉はカラカラで今すぐにも缶コーヒーが飲みたかったが、涼子ちゃんのバイト先のミラーズという喫茶店は、アイスコーヒーでも1000円する。さらに、少しでも涼子ちゃんの売り上げに貢献したいから、苦手なナポリタンもセットで注文している。

僕はパチンコ屋の自動販売機をみつめる。缶コーヒー代100円でも、今は我慢だ。全ては愛しの涼子ちゃんのため。今日こそは写真だけでなくメールアドレスを聞きたい。

僕は疲れた頭を冷やすためパチンコ屋に入店した。冷房が効いてかなり涼しい。ふとパチスロもののぞいてみようかと思いたち2階への階段を登った。

そこで僕は信じられない光景を目の当たりにする。直毛で金髪の涼子ちゃんがパチスロ台に座っていた。僕は一瞬で運命を感じた。少しタレ目で凛とした眼差し。胸元を強調するかのようなワンレンのエメラルドグリーン衣装。パチンコ屋に迷い込んだ森の妖精のようだ。

涼子ちゃんに後ろから声をかけようとした時だった。涼子ちゃんの隣に座っていた長髪の男が涼子ちゃんに話しかけた。

「涼子。そろそろバイトの時間だろ」

「えーもうそんな時間？ あゝ嫌だな。せっかくこれからって時に」

「まあ、後でうちに来るだろ？」

「ビール冷やしといてよ。あなたのためにバイトしてるんだから」

「はいはい。後でたっぷり可愛がってやるよ」

「今日はアレ買つていてよ…」

「わかってるよ。ない方が気持ちいいから。ついな」

僕は後ろを振り返ることなくパチンコ屋を出た。ほぼ無意識のうちは向かっていたのは、本屋だった。何かに導かれたかのように、慶友義塾大学文学部の赤本を手にしていた。



「祐介。差し入れ買ってきてやったぞ！」

「……」

「テーブル置いとくな！ 頑張れ受験生！」

僕は苦手な英語に取り組んでいた。慶友の英語は英検準一級を持っていても難しいとされている。僕は中学卒業レベルの英検3級からスタートし3ヶ月まるまる英語学習に取り組んでようやく英検準一級の勉強をスタートさせたばかりだ。このところ枕を使って寝た記憶がない。朝起きてホットコーヒーを飲み歯を磨いたらすぐに勉強に取り掛かる。食事は1日一食。あまりお金がないのでパスタを茹でて麺つゆとふりかけをぶっかけて食う。初めの頃は、田園調布の実家から母が尋ねてきて弁当や食材を買ってきてくれたりしたのだが、独立自尊の精神を重んじる慶友を志願している以上、あまり親に甘えるわけにはいかない。大学に受かるまでは好きにやらせてくれと懇願した。

「半年で慶友に合格したい？」

「はい」

「本気かね？」

「はい。本気です」

「出身校は？」

「地元の公立高校です。地元は田園調布です」

「なるほど。地頭はなかなか良いようだ。しかしながら、現役の時、なぜ慶友を目指さなかったのかね？」

「正直言って大学よりやりたい道があったからです」

「なるほど。でも、半年で慶友合格を勝ち取るのはかなり難しい。君は一日10時間勉強してるようだが、それでもまだまだ慶友合格ラインには及ばないだろう。そういえば、慶友には通信教育もある。そっちの方が現実的だと思うが、いかがかな？」

「……。ありがとうございます。通信教育課程の道も考えましたが、やはり僕は一般入試で合格したいです。通学でなければ駄目なのです」

「なぜなんだい？」

「僕を必要としてくれる人が慶友にいるからです」



風薫る9月の三田キャンパス。

春に敗れた僕は、夏の日差しに誘われてこの場所に来た。

赤レンガのゴシック様式の由緒ある建物を眺めながらゆっくり歩く。

はじめて観たときから変わらない。

遠くの方では応援団の若き声がこだましていた。

清々しいまでの Aozora.

a l l f o r o n e . o n e f o r a l l .

みんなはひとりのために。

ひとりはみんなのために。

この丘で学べたらいいなって思ってた。都会にそびえたつオアシスのような美しき丘の上で…。

桜に泣いた季節を指折りかぞえ

ひまわりの季節に別れを告げ

僕はこうして今日もまた。

「祐介くん？」

振り返ると藤原涼子がいた。



慶友義塾大学三田キャンパス内にある休憩スペースにて涼子と祐介はベンチに座って談笑していた。涼子は靴を脱ぎ足をぶらぶらさせて遊んでいる。

「なんだ！ そんなこと気にしてたの？」

「だって彼氏さんでしょ？」

「違うって！ いやだなあ、祐介くんたら。パチンコ屋にいたのは単なる私のお友達よ」
涼子はケラケラ笑う。

「実はさ。慶友…。受験したけど落ちちゃったんだ」

「そうなんだ？ でも、また何度でも受ければいいじゃない」

「そうだね」

祐介はなぜだか泣きそうになった。

「涼子ちゃんは将来の夢はある？」

「そうだなあ。ブルーノートNYCに出演したり…」

「したり…？」

「実は、生まれてはじめて人に話すけど、グラミー賞を獲ってみたい。祐介くんは？」

「僕はまだわからない。ギターもやりたいけど、小説も書いてみたいし…。」

「クリエイティブな作業は大変だけど、これからもお互い頑張ろうね！」

涼子は靴を履いた。

ゆっくりと来た道を戻る。

清々しい風が吹き抜けていく。

「じゃあ。祐介くん、またね！」

「ちょっと待って」

祐介は涼子を追いかける。

「…慶友。もし受かったら…」

祐介がいいかけて、涼子はシッと指でサインした。

二人は向日葵のような笑みを浮かべ別れた。

ポストン時間 15時

日本時間 AM 4:00

親愛なる涼子ヒメへ

Aozora～君だけを見つめてる～

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
